

昔むかし、あるところに、金持ちの男が、おかみさんとふたりで暮らしていました。あるとき、男は商売に失敗して、ひどい貧乏暮らしになりました。

ある日のこと、昔なじみの友だちが訪ねてきました。落ちぶれた男を見て、友だちは、それがだれだか分かりませんでした。

「この屋敷の主人はどこにいるんだね」と、友だちがきくと、男が、

「わたしだよ」と答えました。友だちはおどろきましたが、

「じゃあ、中に入らせてもらおうよ」といって、部屋で腰を下ろしておしゃべりを始めました。けれども、お茶も出ないし、おかみさんも姿を見せません。友だちは、

「おまえは、今はひとり暮らしなのか」とたずねました。男は、

「いや。妻は着る物がないので、出て来られないんだ」と答えました。友だちは、自分の上着を脱いで、

「これでも着せてやってくれ」といって、男に渡しました。それから、コインを何枚か取り出して、

「これで、晩に食べる物を買ってきてくれないか」といいました。

男は買い物に行き、おかみさんは、それで、すばらしいごちそうを作りました。友だちは、遅くまで男とおしゃべりしていましたが、やがて、コインをさらに何枚か渡して、「いっそ、住む所を変えてみてはどうだい。これまでの不運も幸運に変わるかもしれない」といって、帰って行きました。

男とおかみさんは、友だちの忠告に従うことにしました。すぐに家を売りはらい、杖を手に旅に出ました。

ひと月かふた月、旅をしたところ、ある村にやって来ました。その村の村長が、「しばらく、ここで暮らしたらどうだね」と声をかけてくれました。村長は、ふたりに住む所と、毎日の食べ物を用意してくれました。

ある春の日のこと、村長は、使用人たちと、畑に種まきに行きました。男もいっしょに連れていきました。村長は、男に、

「ここにひと畝と、あそこにもうひと畝、種をまきなさい」といいました。男はいわれたとおりに種をまきました。

ひと月たつて、畑に行ってみると、一面に種が芽を出していました。ところが、男のまいた畝だけは、芽が出ていませんでした。村長は、

「おまえの幸運はまだ眠っているようだな。だが、まあがっかりすることはない」といいました。

つぎの年も、そのつぎの年も、男は種をまきましたが、芽は出ませんでした。

四年目の春、男のまいた種は、四、五日ですばらしく芽を出し、よく育つて、思いもよらないほどよく実りました。村長はそれを見て、いいました。

「どうだな、おまえの幸運は目を覚ましたようだ。これでおまえも、昔の暮らしにもどれるだろう。別れる前に、わたしたち三人でお祝いをしようじゃないか」

夜遅くまで、ごちそうを食べお酒を飲んでおしゃべりしているうちに、おかみさんは眠くてたまらなくなりました。そこで、村長が、奥の部屋に行つてひと眠りするといひました。

ところで、村長には、息子がひとりありました。息子は、狩人で、いつも朝早くから夜遅くまで狩りに出ていて、帰つてくると、すぐにベッドに入つて寝るのです。その晩も、息子は疲れて帰つてくると、奥の部屋のベッドのところに行きました。そこに人が寝ているとも気づかないで、息子はベッドに横になつて眠りこみました。

やがて、宴が終わると、男は家に帰ろうと、おかみさんを起こしに奥の部屋に行きました。暗がりのなか、目を凝らしてみると、おかみさんのそばにだれかがいます。男は、すばやく剣をぬき、

「曲者だ！」とさけんで、そいつの背中を一突きしました。

村長が明かりを持ってとんできました。見ると、息子が死んでいて、そばで、男とおかみさんがふるえています。

村長は、ふたりを慰めてから、いいました。

「すぐに死体を馬車に積んで、北の丘に運びなさい。死体を下ろしたら、すぐにもどつてくるように」

つぎの朝、村長は、村の区長たちに、行方不明の息子を探すようにと、命令を出しました。そして、もし息子が死んでいたら、死体が見つかった所の区長は、罰金として貨幣二千枚を支払うように命じました。

北の丘で息子が見つかりました。北の区長はおどろきましたが、貨幣二千枚を村長に

支払いました。

りっぱなお葬式そうしきが行われ、息子はお墓はかにほうむられました。村長は、二千枚の貨幣を自分のものにはしないで、男おとこに与あたえて送り出しました。男とおかみさんは、心からお礼をいって旅立ちました。

男の運は開けました。

ある町に着くと、ちょうど、りっぱな屋敷が売りに出されていました。さっそくその屋敷を買って、ふたりはそこで静かに暮らし始めました。商売もうまくいき、財産はどんどん増えていきました。そして、もうとつくにあきらめていたのに、ふたりの間に男の子が生まれました。

さて、あの村長が、旅の商人から男のうわさを聞きました。

「かなり年とつた夫婦でしたが、このほど、男の子が生まれましたよ」

村長は、手紙を一通、男に届けてくれるようにと、商人に頼みました。商人は、手紙を男に届けました。

男は、村長からの手紙を受けとると、それをベルトにはさんで、そのまま忘れていました。夜になってベッドに入るとき、男がベルトをはずすと、手紙が落ちたので、はっと思ひ出して、急いで封ふうを切りました。男は手紙を読みながら、額ひたいをびしゃびしゃたたきました。おかみさんが、

「どうしたんですか」とたずねると、男はいいました。

「聞いてくれ。あの村長さんが、生まれた坊ぼくやをよこせと行ってきたんだ。村長さんはいま病気で、お医者いしやが、生まれたばかりの赤ん坊の心臓を食べない限り、治ならないといふんだそうだ」

おかみさんは、

「たったそれだけのことですか」といいました。

「なんと。おまえは、たったひとりの子をあの人に渡すというのか。そんなこと、できるわけがない」と男がいうと、おかみさんはきっぱりといいました。

「わたしたちが、たとえ親子三人の命を差さしだしたとしても、あの人から受けた恩おんの三分の一にもおよばないでしょう」

つぎの日、ふたりは赤ん坊に服を着せ、代わるがわる抱きしめてキスをし、村へ行く商人に預けました。

村長は、赤ん坊を受けとると、我が子のようにたいせつに育てました。

二年たつと、おかみさんは、ふたりめの男の子を生みました。また村長が、手紙をとづけました。

男は、また忘れて、ベッドに入るとき、はつと思い出して、急いで封を切りました。男は手紙を読みながら、額をぴしゃぴしゃたたきました。おかみさんはすぐに気がついていいました。

「この子も渡しましょう」

こうして、村長は、男の子をふたり育てました。

また二年たつと、今度は女の子が生まれました。男はいいました。

「なあ、わしらも村長さんに手紙を出そうじゃないか。みんなが元気でいるうちに、たずねて来てもらえないか、さそってみよう」

村長は、妻とふたりの男の子を連れてやって来ました。

男とおかみさんは、村長に会って喜びました。そして、二度と見ることはあるまいと思っていたふたりの息子を見たとき、声をあげて泣きました。村長はいいました。

「わたしは、ひとりの息子を失った。あの子は、夜の暗闇の中で、思わぬはずみで殺された。ところが、あなたがたは、昼の光の中で、それと承知でふたりの子どもを差しました。あなたがたの償いは、わたしたちの受けた苦しみよりずっと大きい」

村長夫婦は、男の屋敷で一週間過ごしたのち、子どもたちをそこに残して、名残を惜しみながら帰っていきました。

村上郁再話

資料『世界の民話18 イスラエル』小川超訳／ぎょうせい